
 資料紹介

Блатная музыка と просторечие

中 田 甫

〈Клево лабухи жмурика кочемарят!〉——いまは『コンチネント』誌の編集長をしているマクシーモフは、かつてモスクワの街頭で葬列に出くわした時、背後に聞こえる言葉にわが耳を疑った。およそアウトローの徒輩とは無縁と覚しき風体の市民同士のやりとりである。⁽¹⁾ 〈клевый〉, 〈лабух〉, 〈жмурик〉…はすべて жаргонизм なのだが、それが民衆の話し言葉となっている、そんな現代ソ連の言語層の断面を見せつけられたからである。жаргон とは「共通の目的と関心・利益によって結ばれた特定の集団の間にだけ通用する言葉」⁽²⁾ であるが、盗人・強盗・追剥・空き巣狙い・搔っ払い・掏摸・箱師…など刑事犯の世界で意志疎通の符丁となっているのが、**ненормативная лексика** の範疇に入る、いわゆる блатная музыка である。⁽³⁾ 〈ботать по фене〉あるいは〈курсать〉の能力を持つことが、блатной の社会に仲間入りする不可欠の要件になっているこの「符丁」は、目的が目的だけに、それはあくまでも排他的地下世界の間だけで通用している言葉でなければならないはずである。

そんな「符丁」が地上に浮かび出て世間に流布し理解されてしまえば、本来の機能は損なわれる。そこで新しい別の符丁が考え出される。ここに блатная музыка の寿命の短かさや「新語」がつつぎつつぎに生まれる原因がある。

例えば、ふた昔前頃までの、〈Идет фраер на бан с двумя углами!〉などといった表現を例にとると、最近シベリア地方ではこれが〈Плывет змея на водопад с двумя скобами!〉と言われるようになっているという。⁽⁴⁾

これで判るように идти が плыть に、фраер が змея に、бан が водопад に、угол は скоба にと置き替えられている。前者はすでに俗語的感触のアルゴになっているが、後者は「新語」なのでまだ広がりを見せてはいない。まとも生きるロシヤ人なら分からなくて当然、いわんや我々とつくにびとにおいておやである。

少くとも革命前までは、多少の逸脱は別としても、このようなコトバは刑事

犯の集団やそれにかかわり深い監獄・流刑地といった領域で通用し、一般民衆の世界の話し言葉とは、おのずと一線が画されていた。

しかし、言語が社会的存在である以上、世の移り変りと共に変化するのとは当然である。「在るべくして在るべき」規範言語も、規範自体牢乎たるものでない限り、「在るようにして在る」言語と「在るべくして在るべき」言語との境界は常に流動的であり、「在るようにして在る」言語がその市民権を認知させて規範言語に組み入れられることはまれではない。^[5]

10月革命という、とてつもない地殻変動がもたらした大地震は、言語の世界でもなお余震が続いている。その顕著な現象の一つは規準語い面での変化であり、ненормативная лексика の нормативная лексика への浸透が特徴をなしている。

革命後の言語変革の過程では、革命から30年代ころまでの間と、それ以降との間に、二つの大きな波を見ることができる。前者の頂点は、国内戦・ネップ時代、後者のそれはスターリンの農業集団化と粛清時代。

第一波については、例えば、А. М. Селищев “Язык революционной эпохи” (М. 1928), “Избранные труды” (М., 1968) などによっても、そのあらましを把握することができよう。問題は第二波にある。この時期で一番目につくのは、ненорм. лексика (воровские жаргонизмы) が積極的に話し言葉に受容されている事実である。(もっとも、その走りはすでに、第一波時代の社会荒廃と混迷に根ざした夥しい数にのぼる беспризорники や、いわゆる социально-близкие элементы の跳梁跋扈が社会癌となっていた時期をその濫觴期とすべきであろう)。こうした趣向に弾みをつけているのが、矯正施設——「矯正」労働その他拘禁施設（ソ連の行政統計は国家機密だから正確な数や受刑者数は不明）——だとはなんとも皮肉な話で、言葉のほうは全く「矯正」されることはない。これら施設に収容される諸種の非刑事犯の世界での生活で、牢名主的存在として牛耳を執っているのは、ほとんど例外なく блатной のカテゴリーに属している刑事犯であり、その支配力は言葉の領域にまでおよんでいるのである。すなわちここではグレシャムの法則が機能し、「悪」語が「良」語を駆逐し続けてやまない。釈放された人びとが全国へ四散するにつれ、「汚染」された言葉はソ連全土に「かの伝染病のごとく蔓延」する。その時、воровские жаргонизмы は隠し言葉たる本来の目的からしだいにずれて、方言よりも普及範囲の広い <городское просторечие> となって生きて行くことになる。^[6]

「лит. яз. には絶えず方言・俗語・隠語が入りこんでおり、隠語はたんに隠

語どうしの間を浮動するばかりではなく、しょっちゅうふだんの日常会話の中へもぐり込んでくる。そうしたアルゴリズムの浸透の打ってつけの培養基となっているのが俗語である」^[7]（辞書A小の旧版と新版との、あるいはA小とウシヤコフの стилист. пометы の移り変りを見よ）。

だから「隠語を覚えてみたり使ってみたりすべきではない」^[8]という学者のプリーズムも現実を前にしてはしばしば大勢に順応せざるを得なくなる：1971年版《Новые слова и значения》には——вкальвать, врезать, гробануть, доходить, загорать, капать, махнуть (ся), скабак, фарцовка, хохмить, чокнутый, тянуть резину, дать на лапу..., 84年版には——балдеть, барыга, втираж, загащик, заложить, зона, кранты, настучать, нахомутать, покантоваться, пупок, усекать, шебутной, от звонка до звонка, катить бочку, драть когти... などに〈прост.〉と注記されているが、その出自といえ、воровские жаргонизмыなのである。なお、1971年版（60年代）《Новые слова...》には3500語ほど収録されているが、当初予定は約650語（19%）の жаргонизм を〈прост.〉として登録すべきところ、それが約400語（12%弱）に削減されている。^[9]なお、84年版（70年代）のそれには、筆者の大ざっぱな計算だが、約300語（5%弱）が〈прост.〉となっている。

78年にソ連国家賞を受けた Астафьев 《Царь-рыба》には、方言や俗語が頻出するが、вор. жарг. も混在している—— бормотуха, бугор, кумпол, ма-руха, мойка, руль, сгореть, ширмач... 等々。私は作者本人に会う機会を得たので、じかに確めたところ「うちら（クラスノヤルスク地方）じゃ、そんなコトバはふだん俗に使われているので、私もことさら色づけにと出したものではない」との答えが返ってきた。ならば、これらの語もすでに бич, дрын, кореш, марафет наводить, туфта などと共に разг. ないし прост. と注記してもよい時期がきているのではないか。

西側で出版される読み物、とりわけ「ラーゲリ物」（この表現の適否はさておくとして）などに接する場合、これに必要な字引類がないとひどく不便をかくことになる（ソ連国内で公にされた作品はテーマの性質上じつに数少なく、まとまった回想記としては Б. Дьяков 《Повесть о пережитом》（М., 1966）が目につく程度である）。

西側で公刊された作品は数多いが、そのなかでも、М. Розанов “Завоеватели белых пятен”（Берлин, 1952）、Б. Ширяев “Неугасимая лампадка”（Нью-Йорк, 1954）、А. Шифрин “Четвертое измерение”（ф./м., 1972）、П. Якир

“Детство в тюрьме” (Лондон, 1972), В. Шаламов “Колымские рассказы” (Лондон, 1978), Е. Гинзбург “Крутой маршрут” (Италия, 1969–79), В. Марамзин “На краю географии” (Иерусалим, 1979), Эд. Кузнецов “Мордовский марафон” (Иерусалим, 1978), С. Довлатов “Зона” (США, 1982), М. Якобсон “Карзубый” (США, 1983), Л. Консон “Краткие повести” (Париж, 1983)などはいずれも文学的にすぐれた作品であり、とくに最近では、Вадим Делоне “Портреты в колючей раме” (Лондон, 1984)⁽⁴⁰⁾は傑作である。だが、これら一連の作品にはかなりの密度で жаргонизм が織り込まれているので、その知識に欠けると、隔靴搔痒の感も甚だしいものがある。西側の方が表現の制約が緩いために、近頃こうした傾向が顕著である——Ф. Кандель “Зона отдыха” (Иерусалим, 1979), Ф. Незнанский・Э. Тополь “Смертельные игры” (Германия, 1981), Юз Алешковский “Кенгуру” (США, 1981), Ев. Попов “Веселие Руси” (США, 1981), И. Суслов “Выход к морю” (США, 1982), М. Демин “Перекрестки судеб” (США, 1983), Ф. Незнанский “Ярмарка в Сокольниках (Германия, 1984)... を見よ。

数年前(1981年—82年)に、ソ連で「話し言葉辞典」——つまり〈俗・隠語辞典〉のこと——編纂の可否について論議だけは活発に行われたものの、結局蛇が出そうで蚊も出なかった。⁽⁴¹⁾ ロシア語研究所にはすでにカードは十二分に集められている筈。にも拘らず、このような企画が陽の目を見ないのは、学問的というよりむしろ政治的な思惑による強力な抑止力が働いているからであろう。したがってこの種の辞書や便覧に関しては、西側で出されている書物に頼らざるを得ない現状である。個々の語義の正誤・批判をする知識を持たないので、出版されている主だったものを羅列してみると：

- ① **В. Трафтенберг Блатная музыка. Жаргоны тюрьмы** (Сп. 1908)——ボドアン・ド・クルトネの監修・序文つき。ロシア各地の監獄・中継獄における隠語研究書、見出し語800。諺・俚言・歌などのほか、19世紀末から今世紀初頭にかけての学者の研究論文もリストアップされている。隠語はその消長や意味の変化も激しいが、今日なお生き続けている語もあることを本書によって知り得る。すぐれた歴史的価値のある書物。
- ② **М. и Б. Крестинские Краткий словарь современного русского жаргона** (Ф/м., 1965)——語の選択がお粗末で、авоська, беспризорный, буржуйка, жил-площадь, колхоз... までも収めて語数400。この種の企画の走りではあるが、企画倒れ。
- ③ **И. П. Воривода Словарь жаргонных слов, употребляемых преступным**

элементом (Алма-ата, 1971)——カザフスタン共和国の収容所・МВД・民警等の勤務員用に編集されたもので、部外秘扱、筆者の手許にあるのは、タイプ原稿のコピーなので整理不十分。語数は3,000。С. М. Попов (М., 1927) のものを含めると5,000語になり、職業・衣服・金銭等項目別(300語)の分類も付けられている。既存の字引の中では収録語は最も多い。

④ **Вал. Чалидзе Уголовная Россия** (Нью-Йорк, 1977) ——1964年キエフ民警局刑事捜査部による部外秘の字引、語数900余が巻末に掲載されている。

⑤ **Russische Gaunersprache** (F/м., 1978)——内容は a) O. Horbatsch: Russische Gaunersprache (20世紀初頭から70年代までの25篇におよぶ関係文献の紹介。b) В. Бец: Босаяцкий словарь. Одесса, 1903 (100語足らずの語集)。c) Н. Виноградов: Условный язык заключенных Соловецких лагерей особого назначения. Соловки, 1927 (ソロフキ地方郷土研犯罪部会研究報告としてまとめられたもの)。d) В. М. Попов: Словарь воровского и арестантского языка. Киев, 1912 (編者は警察署長、警官・刑事用手引書として作成されたもので、語数1700)。歴史的資料である。

⑥ **Броня Бен-Яков Словарь аргю Гулага** (Ф/м., 1982)——ソルボンヌに提出の博士論文の一部となっているもの。語数は1,200語弱だが、外国人の手により外国人用に編まれた唯一の辞書。従って複数形、完了体・不定了体の別、要求格、力点などが明示してあるので便利。特徴(これが欠点ともなるが)は、西側だけで公にされた28名の作家の作品44篇の中から語が選び出されており、その文例が挙げられていること。資料の大半が文芸作品だから、作者の造語か否かに気配りする必要がある(これは後述⑨⑩にあっても同じ)。

⑦ **А. Скачинский Словарь блатного жаргона в СССР** (Нью-Йорк, 1982)——語数3,500。それに慣用句・присказки など1,000の二部から成っており、用例・同義語・類語が付され、力点もつけてある。編者の10年近い体験が裏打ちされているので、(6)とは対蹠的であるが、(6)と比較対照して利用するのは有効である。

⑧ **Вл. Козловский Собрание русских воровских словарей** (Нью-Йорк, 1983)——4巻物で、19世紀末から今世紀70年代までの主たる文献30篇を集めたもので、①③④⑤もこの中に含まれている。モスクワ(1952年)、スヴェルドロフスク(1952年)、キエフ(1964年)、リガ(1967年)、バクー(1971年)などで治安関係者専用に編まれた語集も載せてあり、前記30篇に対する注解もある。資料的価値のほうが大きい。

⑨ **SOVIET PRISON CAMP SPEECH** (Wisconsin, 1972),

⑩ **Трудные слова у Солженицына** (Нью-Йорк, 1976).

⑨⑩については注釈を省く。^[12]

なお、近い将来に、К. В. Успенский 《**Словарь ненормативной лексики**》がアメリカで出版されるとのことであったが、肝心の編者がウイーンで心臓発

作のため客死したとの訃報を目にした（《Русская мысль》 № 3551）。作業は引継がれるものの、上梓は遅れ一兩年先になるとのことである（《Обозрение》 № 13）。

終りに、次のようなパロディをご紹介しておく。

ЭПИТАФИЯ НА МОГИЛЕ БЛАТНОГО

Ты врезал дубаря,
Ты сквозанул с концами
туда, где никому не надо ксив,
В одну хавиру вместе с фраерами,
у Господа прощенья закосив.

И всю дорогу с почерка горя,
Нигде не раскололся ты ни разу.
Мы за тебя всегда держали мазу,
Так что ж ты оборвался втихаря?
Стоим на цирлах,
Без вина косые.
Но как ни жмись и как ни шестери,
На кичу попадешь, на сухари.
И негде нам качать права в России.

А ты кемаришь,
Ты теперь в законе.
Разбейте понт,
Идет последний шмон:
Бочата сдрючат,
но никто не тронет
На желтой паутине чертогон.⁽¹⁴⁾

このパロディは、現代ソ連の言語の社会病理現象の一面を如実に物語っている。

百年前にトゥルゲーネフは、великий, могучий, правдивый русский язык が、20世紀のダーリを必要とするほどに **свободный** であることを、はたして予見していたであろうか？

注(1) “Язык сопротивляется насилию” (本文⑥より)。

(2) О. Ахманова “Словарь лингвистических терминов (М., 1966).

(3) 発生的には単独に創られた人為的なものではなく、行商人、職人、船乗りたちの間の隠語やユダヤ人、ジプシーその他諸民族の盗賊隠語などの要素がかなり混入しているし、監獄やラーゲリでの隠語も包括されて、一般にはこれが **блатная музыка** と呼ばれている。詳しくは Валерий Чалидзе 《Уголовная Россия》 (Нью-Йорк, 1977) стр. 87-100 を参照のこと。

(4) Г. Александров “Я увожу к отверженным селениям” (Париж, 1978), т. 1, стр. 140.

(5) 内村剛介「しがらみとしての選択」(三省堂 Booklet No. 54) 参照のこと。

(6) “Городское просторечие” (Ак. наук СССР, м., 1984).

〈Если в XIX-XX вв. городское просторечие формировали диалектное словоупотребление и городское койне, то к 60-м годам нашего века такими языковыми доминантами становятся жаргоны и “мещанизмы” разного рода.〉 стр. 12.

(7) “Литературная норма и просторечие” (М., 1977). стр. 29.

(8) Е. Земская “Русская разговорная речь” (М., 1979). стр. 29.

(9) “Обозрение” № 5 (Париж, 1983). стр. 33.

(10) 著者は詩人 (1948—83)。ロシアに帰化したフランス良家の出。独軍の仏占領時代に多くのユダヤ人を救い、のちに捕えられてガス室で虐殺された女流詩人・修道女 **Мать Мария** やトハチェフスキー元帥とは遠縁に当る。1966年にブコフスキーらと共にプーシキン広場での知識人抑圧反対デモや1968年赤い広場でのチェコ侵入反対集会に参加したため、刑事囚ラーゲリに収容された。本書は彼の唯一の散文作品で、上梓を見ぬうちに35歳の生涯を閉じた。1983年のダーリ賞受賞作、近く仏語訳が出版される由。

(11) “Обозрение” № 9 (Париж, 1984). стр. 35.

(12) 上記のほか、帝政時代の語については、А. Кошко “Очерки уголовного мира царской России” (Париж, 1926), ソ連初期のそれについては、Ю. Безсонов “Двадцать шесть тюрем и побег с Соловков” (Париж, 1928), Ив. Солоневич “Россия в концлагере” 1-2. (Софья, 1936), М. Бойков “Люди советской тюрьмы”, 1-2. (Буэнос-Айрес, 1957), Н. Н. Краснов мл. “Незабываемое” (Сан-Франциско, 1957), А. Кауфман “Лагерный врач” (Тель-Авив, 1973) などである程度は知ることができる。すぐれたノンフィクションである Ал. Варди “Подконвойный мир” (Ф/м., 1971) には巻末に250語にのぼる難解な語の注釈が

つけてあるので便利。また、М. Демин “Блатной” (Нью-Йорк, 1981) もノンフィクション的であり、彼らの世界の現実が描かれ、多くの жаргонизм が文中で説明されているので参考になる。ただ、これらすべての資料は歴史的なものであり、前にもふれたが、これら語の消長と意味の転移が激しいことを念頭におく必要がある。

- (13) ペンネームは К. Косцинский (1913-84)。文筆家・翻訳家。職業軍人として独ソ戦に従軍したが、反ソ的言辞を弄したかどで1944年党を除名された。1960年には反ソプロパガンダとアジの罪で5年のラーゲリ刑に処せられた。服役中アルゴの研究をし、釈放後これに専念。78年アメリカへ出国、ハーワード大学ロシア研究センターで辞書づくりに取り組む。語源・使用範囲・発生時期・語結合等を網羅した5万語にのぼる本格的俗・隠語辞典を世に問う手筈になっていたが、1984年12月28日に急逝した。なお、服役中ソ連科学アカデミー言語学研究所 Филин 教授より Дубровлаг 政治部長あてに、彼の研究は貴重だから支援に尽力されたしとの公文書が出されている。

- (14) Сост. А. Шифрин 《Поэзия в концлагерях》 (Израиль, 1978)